

民研だより

民主教育研究所
Research Institute of Democracy and Education

No. 146
2020年12月10日

CONTENTS



- ◆ 「学び」への疑い 宮下直樹 1
- ◆ 「特別支援教育と子ども・学校」研究委員会 中村尚子 3
- ◆ 第29回全国教育研究交流集会報告 鈴木敏則 4
- ◆ 日誌、寄贈図書等 8

「学び」への疑い

宮下直樹（全日本教職員組合副委員長）

京都府北部の決して裕福でない農家で育った。

中学校2年生の秋、稲刈りを手伝いながら、前日の二次方程式の学習を思い出し、「将来農業するのに、なんの役に立つのか」などと考えた。しかし、誰にも言わなかった。部活動と生徒会活動が楽しく、「早く放課後になれ」と思いながらすごしていた。

高校2年生の現代国語の定期テストで、解答用紙の裏に「なぜ、みんなに同じ答えを強制するのか」と書き、表は名前だけ書いて白紙で提出した。漱石の「心」を題材とした問題だった。返ってきた解答用紙には、赤字ででかでかと、「だれが強制した!?君が感じたことこそが答えだ」とあった。「そういうことではないだろ」と思ったけど、うれしかった。新採の先生だった。0点だったけど、単位はいただいた。

高校3年生の夏、担任の先生に「模擬試験、前より偏差値上がってよかったな」と言われた言葉にひっかかった。自分の偏差値が上がるということは、日本のどこかの高校3年生の偏差値が下がったことになる。それを自分は喜ぶのかと。何人かの先生方に問うたが、やめた。どの先生のお話にもどうにも納得できなかった。そのうち、「とはいえ、合格するには偏差値を上げることが必要」と自分に納得させた。

その後、私は、実家を離れ、京都市内の大学に寮から通うことになった。それ以来、40年間、農家を継ぐことなく教師となった私に、ずっと突き刺さる言葉がある。「地域を捨てる学力」。

小学校の教頭先生をしておられたS先生に、6年生で専科として社会を教えていただいた。世界地図を教室に常設し、国々の地勢や経済とともに、人々の生活と「たたかい」を語っていただい

た。そして、常に地元地域の課題を結び付けて語られた。丹後ちりめんが不況に陥った背景にある世界情勢、そして、早朝から夜遅くまで機屋に籠る(3食すべて機屋でとっていた)母の姿がつかかった。日米関係とコメの作付面積に嘆く父の話が理解できた。S先生は、よく、家を訪れ親と話し込み、酒を酌み交わし、そのまま朝出勤された。S先生は酔うと必ず語っていた。「私は地域を捨てるために学力をつけてほしいのではない。村を守り、豊かにする主権者を育てたい。しかし、結果として、子どもたちは学んだのちに地域を出ていく…」

全教で役員をすることになる前の年のこと。

ある6月、中3のAくんは授業を抜け出した保健室で、「授業にもどれ」なんてこと言っても仕方ないのでアホな話していた学年主任の私に、「おれ、高校いけへんか?」とつぶやいた。茶髪、教師反抗、エスケープ等この紙面上では書けない「事案」の主であったAくん。だいたい教師と名のつく者には「ほっとけ」「あっちいけ」「かんけいないやろ」の連打。これまた紙面では書けない家庭環境のもと、保護者にも言えず、担任にも言えない。友達になんかもっと言えない(この感覚、イマドキ。「スクールカースト」とまで称される子どもたちの「階層構造」に私たちはけっこう鈍感)。「高校、いけへんか」をAくんはどんな思いで口からひねり出したのか。もしかすると、中学入学以来はじめての教師への「要求」かもしれない。「高校でとかへんかったら仕事ないやろ」という。それを「学び」への要求としてとらえるか。

その日から、授業中に(たまに授業エスケープした時に別室で)九九からいっしょに個別のお勉強。担任や学年・生徒指導部・管理職に了解を得て。(これがけっこう難関で重要!「甘やかすな」「特別扱いするな」「他の子はどうする」…)結局、12月には中3の因数分解まですすめた。そして、1月の公立選抜入試で合格!「おれ、やればできる子やん!」って。

きっと、中教審の「個別最適な学び」(または

「個別最適化された学び」)の概念とは違う。「最適」と決めるのはだれか?

中教審答申素案に、「AIの専門家も交えて議論を行った結果、次世代を切り拓く子供たちに求められる資質・能力としては、文章の意味を正確に理解する読解力、教科等固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力、対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出す力などが挙げられた。」とある。わざわざ「AIの専門家も交えて議論」したと前置きするあたりに、なんとも言えないうさん臭さ、「AIの時代について行こうと思うならば」と皆々こぞってひれ伏す権威主義的匂いを漂わせながら、「読解力」「自分の頭で考えて表現する力」「対話や協働を通じて新しい解や納得解を生み出す力」などが列挙される。

グローバルに活躍できないと「学力」「資質・能力」ではないのか。最低限の「生きる」を獲得するための力をつける地べたの「学力」を、私は否定できない。相対的貧困率13.5%(ひとり親家庭では過半)のもとでの、学びを「自己調整」する力や「粘り強く取り組む」力をどうとらえるか。

私の出身小学校も中学校も、どちらもすでに統廃合され廃校となっている。出身地元公立高校も再編計画の対象。地元で生業を得ている同級生は3分の1にも満たない。前述したS先生は先日お亡くなりになった。どんな思いで、衰退する地域経済のもとでの学校の姿を見ておられたのか。私は、地域のために何を学び、何をしたのか。そしてこれから何ができるのか、わからない。ただ、全教にいて、「学びとは?」なんて議論をするたびに、生まれ育った京都・丹後地域を想起しながら考えてしまう。



「特別支援教育と子ども・学校」研究委員会 報告

中村尚子（委員長）

教育条件整備のおくれ

学校という教育施設には、学習の基礎的集団となる学級に対応する教室があり、そのほか教科の特性に合わせた特別教室や室内外の運動場等々があり、教職員室なども不足なく整備されていることは大前提である。普通教室が不足するほど子どもが増えた場合は、学校の新設が計画される。

しかし障害児教育では、すでに20年近く、「教室不足」が指摘されつづけてきた。養護学校義務制実施（1979年）以降、高等部への希望者全員進学もあり、養護学校児童生徒数は増加の一途をたどっているのに、学校建設がすすまないため、開校当初に想定規模をはるかに上回る学校が大都市を抱える都府県を中心に問題化していた。これを放置したまま、学校教育法改正によって、特別支援教育体制へと移行していったのである。

過大・過密は人権侵害

民研年報第16号（2016年）の小特集において、「特別支援教育の10年と教育条件整備」と題して、本研究委員会の報告をまとめている。報告は、特別支援教育開始から10年を経て、新たな矛盾を指摘しているが、特別支援学校の過大・過密問題としては、東京都の特別支援学校再編計画の分析と教員への聞き取り調査に取り組んだ。東京都の場合、障害種別をこえた学校という特別支援教育の眼目にもとづいた知的障害校と肢体不自由校の統合と大規模校化が同時に進行していることが明らかになった。現実には、普通教室の不足、特別教室や図書室の転用という学習の基本的条件が壊れているだけでなく、休み時間にトイレにいけない、男女別の更衣室が確保できないなどの生活指導上の問題や、教職員会議の場所さえ不足しているという事態が生じていることが明らかになった。総じて、子ども、教職員双方の人権侵害である。

保護者とともに

ところで、「教室不足」の問題は2013年前後からたびたびマスコミで報道され、国会でも取り上げられてきた。文科省もその「不足数」などを公表するようになってきた。並行して、この問題が解決されない背景に、特別支援学校の設置基準がないという指摘が、教職員組合と保護者からあがった。切実なねがいをもつ人びとがつどい、2011年11月、「設置基準の策定を求め豊かな障害児教育をめざす会」が結成され、2013年からは国会請願署名が活発に取り組みされている。

こうした切実な関係者の声に対して、文科省は「特別支援学校は障害の種類ごとに柔軟な対応が求められるから」設置基準を設けないと答えつづけてきた。

「検討する」という言葉が発せられたのは2019年11月の交渉である。背景には、障害のない子どもとの間の差別をなくし、真の平等をめざす障害者権利条約の存在もあるが、保護者、教職員がねばり強く声を上げつづけたことが力になったということはまちがいない。

設置基準の具体化と研究課題

今夏からは、「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議」や中教審でも設置基準が議題にあがり、国が案を提示し来年度施行と言われている。目前に迫っているこの課題について、本研究委員会では、小・中・高校等の設置基準や学校教育法施行規則をはじめとする関連法規を精査し、設置基準に盛り込むべき内容を検討している。前述したように、設置基準を求める関係者のねがいは、人権侵害ともいえる劣悪な現状を変えたいということにあった。しかし、文科省は、新設校に適用する基準をつくることにこだわり、既設校の改善を除外している。こうした文科省の動向を分析しつつ、広範な関係者とともに、障害のある子どもの教育権保障に資する議論をすすめていきたい。

子育てと教育に『命どう宝』を根づかせる

一人権と平和の教育をとらえ直そうー

第29回全国教育研究交流集会 **報告**

11月28日(土)・29日(日) オンラインによる開催

第29回全国教育研究交流集会は「子育てと教育に『命どう宝』を根づかせる一人権と平和の教育をとらえ直そうー」をテーマに11月28日(全体会)29日(分科会)の両日、オンラインで開催されました。

主催は民主教育研究所、沖縄県民間教育研究所と沖縄県民間教育研究団体連絡会、後援はおきなわ住民自治研究所とおきなわ子どもを守る会です。

参加者は184人、東京、北海道、京都など1都1道1府22県からの参加でした。うち沖縄からは77人の方が参加しました。

全体会

全体会は民研と沖縄の両代表の挨拶からはじまりました。挨拶はオンライン集会のため短いあいさつとなりました。

梅原利夫さん(民主教育研究所代表運営委員)「私(たち)がとらえる沖縄への視座」、長堂登志子さん(沖縄県民間教育研究所所長)「『命どう宝』守ろう子どもたちを!」は『人間と教育』107号(9月発行)に掲載されておりますのでぜひお読み下さい。

講演は上間陽子さん(琉球大学)。「親の背景、子どもの背景ー沖縄の女性調査より」と題して、2011年からの予備調査を含め女性調査、聞き取りから、子



どもたちと家族の状況は、誰かに語っても解決できないと思っており、一人で逃れようとしている。その困難が社会的に見えなくなり、社会や子どもの中にも分断がある。子ども食堂や無料塾というレベルでなく、それ以前の問題であり、全体的なケアの不在と報告されました。

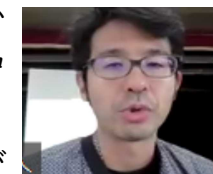
シンポジウムは「沖縄から日本の教育をとらえ直す」をテーマに「<不可視なもの>への想像力についてー環境、社会、そして私」と題して安藤

聡彦さん(埼玉大学)、「『社会』とのつながりを求めている子ー義務教育と『少年革命家ゆたぼん』」と題して



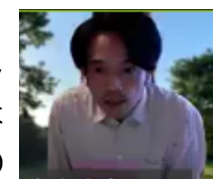
下地治人さん(沖縄県公立小学校)、「休校経験の意味と学力ー混乱の中から芽吹く民主主義」と題して中

村清二さん(大東文化大学)が報告され、白熱した討論が



交わされ、予定の16時に終了後(ゆんたく)も多くの

の方がオンライン上に残り、議論は18時までつづきました。



なおシンポジストの報告は来年発行の『人間と教育』10

9号(3月10日発行)に掲載されますので、ぜひご購読下さい。また、多くの方々から集会の感想



分科会

第1分科会

子ども・青年の育ちと主権者教育

世話人 梶村光郎(沖縄大学)

馬場久志(埼玉大学)

報告

①問題提起 馬場久志(埼玉大学)

②「コロナ禍で考える保育の新と真」

保育士(沖縄県公立保育兼)

③「子どもたちの『今、ここ』を寿ぐ学校を」

大江未知(兵庫県公立小学校教諭)

参加 14人

馬場久志さんの問題提起に続き、2本の報告がされ、討論が行われました。

沖縄県公立保育園の保育士さんからは、子どもの権利を正当にとらえる質の高い保育のために、保育環境の改善と保育者の専門性を大切にしていることが、多数の写真などを交えて報告されました。大江未知氏からは、コロナ休校から再開した生活で、「子ども理解を基盤にすること、子どもと同じ地平に立つことが改めて欠かせないとわかりました」と、詩を読む実践や多数のやりとりを示しながら報告されました。

討論は個々の報告についてなされましたが、両報告に通じる子ども理解のことや、職場での取り組みなどについては、両報告を行き交う議論ができたことが特徴的でした。報告から励まされ、また報告者を励ます討論でした。

第2分科会

学力向上策と道德教育の教育課程

世話人 和泉康彦(沖縄・数教協)、船越裕和

(沖縄県公立小学校・全生研)、金馬国晴(横

浜国立大学)、中村清二(大東文化大学)

報告

①問題提起 金馬国晴(横浜国立大学)

②「道德の教科化と学校スタンダードによって子どもたちがどんな様相を見せているのか」

船越裕和(沖縄県公立小学校・全生研)

③「学力テスト全国6位、その光と影」

和泉康彦(沖縄・数教協)

参加 30人

道德はうまく実践できればいいものか、教科道德の存在自体が問題ではないか。関心・意欲・態度や思考・判断・表現の評価は可能なものか。それらの道德性の評価は授業に含まれ、評定することが問題を含む。これらについて教科と教科外は同じか異なるか。教科外の固有性は何か。低学年では、価値を論争するような授業は可能か等の討論でした。

第3分科会

子育てと学校づくり・教職員の働き方

世話人 儀間奏子(沖縄県公立小学校・日生連)

三村和則(沖縄国際大学)、松田洋介(大東

文化大学)、勝野正章(東京大学)

報告

①問題提起 松田洋介(大東文化大学)

②現代の教員文化の変容と働き方改革

長谷川裕(琉球大学)

③小・中・高校現場の働き方改革の現状と課題

澤岬優子(沖縄県教職員組合那覇支部)、

照屋 淳(沖縄県立高校)

④綱(つな)からつながる地域の輪

儀間奏子(沖縄県公立小学校)

参加 22人

長谷川裕さんの報告にて「献身的」教師タイプは困難に直面しており、新しい可能性として

「非献身的充実」という教師像の意義が示されました。その後の、沖縄県の教員の勤務実態を明らかにした照屋淳さん、澤岬優子さんの報告、ならびに、地域の伝統行事である綱曳への参加を通して、子ども集団のみならず教師の関係性も変わっていく様子を示した儀間奏子さんの報告を通して、加重負担を解消することはもちろんのこと、それだけでなく、教師が目の前の子どもに応答しながらも、楽しく主体的に実践を展開できることが大事であり、その条件をさぐるのが、「非献身的充実」という教師モデルをつくっていく手がかりになるということが確認されました。

対象とされるなか、子どもたちが自分の心身を大切に、性を自分ごととしてとらえ学んでいくということが難しくなっているという深刻な状況もまた共有されました。



第4分科会

性とジェンダー平等の教育

世話人 船越裕輝(沖縄性教協)、村末勇介(琉球大学)、杉田真衣(東京都立大学)

報告

- ①問題提起 杉田真衣(東京都立大学)
- ②学校・地域から見える子ども、若者の性
笹良秀美(沖縄・助産師)
- ③沖縄で生きて学んで作りだす～性と生、障害、平和の学び～
安里瑞穂(特別支援学校中学部)

参加 25人

沖縄県内の小中高校での性教育実施率がほぼ100%だということについて、行政が少しも関与しなかった15年前と違って行政が財政的にも援助するようになってきていること、とはいえその内実を見るとポスターを貼っただけといったケースもあることや、授業ができててもごく短い時間に留まっていることなどが確認されました。産むことを奨励するのではなく、リプロダクティブ・ヘルス／ライツを教える性教育や、そもそも思いがけない妊娠をしないための性教育が必要であることも確認されました。学力向上が至上命題とされ、性が人権の問題ではなく「シメる」生徒指導の

第5分科会

平和教育の創造

世話人 山口剛史(琉球大学)、中嶋哲彦(愛知工業大学)

報告

- ①問題提起 山口剛史(琉球大学)
- ②「国を越えて歴史認識は共有できるのか? :対馬丸事件から考える」
北上田源(琉球大学・非常勤)
- ③「大学生による修学旅行生への平和学習支援の取り組み:スマイライフの活動実践」
(沖縄国際大学スマイライフ)

参加 23人

報告を通じて、

- ① 学習者自身の対話を軸にして、学習者の問いを引き出し、その問いへの答えを学習者自身の対話を通じて模索すること
- ② 歴史認識を共有し、また他者の歴史認識を尊重し合う関係づくりの取り組みを自覚的に組織すること
- ③ 他者に語ることを通じて、他者の視点を介して自らの認識を深めたり、自らの考えを問い直したりすること

以上、3点が確認されました。



第 6 分科会

基地・環境問題と教育

世話人 喜屋武幸(沖縄中学校・全生研)
 屋慶名美和(沖縄民間教育研究所)
 名嘉正勇(沖縄民間教育研究所)
 安藤聡彦(埼玉大学)

報 告

- ①問題提起 安藤聡彦(埼玉大学)
- ②「米軍基地と環境～PFOS問題～」
 屋慶名美和(沖縄県民間教育研究所)
 名嘉正勇(沖縄県民間教育研究所)
- ③「辺野古の米軍新基地建設問題と地域の生活・教育」
 喜屋武幸(沖縄中学校・全生研)

参 加 20人

- ① 辺野古基地問題の歴史と現状をどう見るか?
- ② PFOS等のフッ素化合物による沖縄県の水道水汚染問題の概況、ならびに発生源とみられる基地内への立ち入り調査ができない構造的背景
- ③ 基地問題について子どもたちが学習することの困難さの要因(地域や保護者の意向、子どもたち自身の意識、文科省や行政からの圧力)
- ④ これから必要な取り組みや考え方の4点について討論しました。

第 7 分科会

自治体づくりと教育・住民運動

世話人 赤嶺ふきこ(おきなわ子どもを守る会)、朝岡幸彦(東京農工大学)

報 告

- ①問題提起 朝岡幸彦(東京農工大学)
- ②沖縄の地方自治と教育運動
 安原陽平(独協大学)
- ③教育権保障と自治体の役割
 石山雄貴(鳥取大学)
- ④憲法を子どもの権利へ
 赤嶺ふきこ(おきなわ子どもを守る会)

参 加 12人

憲法が保障する地方自治・平和に生きる権利や人権が踏みにじられている事実を端的に象徴する場の一つが沖縄であり、それが端的な形で問われている問題が米軍基地と新型コロナウイルス感染症(COVID-19)への対応であるとされます。

この分科会では、3人の方からご報告いただきました。

報告と議論を通して、沖縄における地方自治・教育運動・学問のそれぞれの領域を尊重しながらも強く連携して課題解決する可能性が確認されました。



民研日誌 9～11月

- 9月 1日 中等教育研究委員会
- 9月 3日 「井めざせ20人学級」院内集会
国際教育研究委員会
- 9月 9日 三役・事務局会議
国際教育研究委員会
- 9月12日 運営委員会
フォーラム「子どものケアと教育の現場から」
- 9月14日 子ども全国センター幹事会
『人間と教育』編集委員会
- 9月15日 中等教育研究委員会
- 9月16日 「特別支援教育と子ども・学校」研究委員会
- 9月17日 「環境と地域」教育研究委員会
少人数学級と豊かな学校生活を求める院内集会
- 9月18日 「ジェンダーと教育」研究委員会
- 9月19日 教育課程研究委員会
- 9月20日 教育子育て9条の会
- 9月25日 自治労連第42回定期大会へメッセージ
- 10月 3日 つどい実行委員会
子ども全国センター総会
- 10月 5日 中等教育研究委員会
三役・事務局会議
- 10月 6日 『人間と教育』インタビュー
- 10月 7日 「特別支援教育と子ども・学校」研究委員会
- 10月10日 運営委員会
フォーラム「世界の子どもと教師」
- 10月12日 日本学術会議新会員任命拒否に抗議・撤回
を求める集会
- 10月15日 「環境と地域」教育研究委員会
- 10月16日 「ジェンダーと教育」研究委員会
中等教育研究委員会
- 10月17日 教育課程研究委員会
- 10月22日 日中友好協会第69回大会へメッセージ
『人間と教育』編集委員会
- 10月24日 子ども研究委員会
- 10月26日 会計監査
- 10月30日 子ども全国センター幹事会
- 11月 1日 高校教育研究委員会2020年度総会
- 11月 2日 三役・事務局会議
- 11月 3日 平和といのちの人権を!!!3大行動
「学問の自由」を守れ学者・学生・市民による
抗議行動
- 11月 6日 30周年記念論文集編集会議
- 11月 7日 運営委員会
- 11月 8日 全国教育研究交流集会リハーサル
- 11月14日 安倍教育政策NO・平和と人権の教育を!
ネットワーク学習会 少人数学級実現今こそ!
「環境と地域」教育研究委員会
- 11月18日 特別支援教育と子ども・学校」研究委員会
- 11月20日 中等教育研究委員会
- 11月21日 教育課程公開研究委員会
- 11月24日 『人間と教育』出張校正
- 11月26日 『人間と教育』編集委員会
語ろう、子どもと教育～参加と共同の学校づく
り・教育課程づくり交流集会打ち合わせ
- 11月27日 入館団体会議
- 11月28日 全国教育研究交流集会全体会
- 11月29日 全国教育研究交流集会分科会
- 11月30日 子ども全国センター文科省交渉

寄贈図書・資料 9～11月

- ◆ 『学校も地域もひらくコミュニティ・スクール』
宮崎稔 農文協
- ◆ 『教科書レポート』
「教科書レポート」編集委員会 日本出版労働組合連合会
- ◆ 『トロロの森をつくる』
トロロのふるさと基金(編著) 合同出版
- ◆ 『都立高校にのびやかな、自主と自由の校風の回復
を!』 都立高校の自由を取戻す会

民主教育研究所『年報2020』(第20号)

2020年12月発行 1800円

学校教育の「道徳」化

～私たちがめざす道徳性の教育とは～

学校教育全体の道徳化を批判する
学習指導要領における「道徳」の教科化を批判する
「特別の教科 道徳」教科書の内容を批判する
対抗的な実践 各地の具体的な実践の動向をさぐる

季刊『人間と教育』を発行しています

1190円+税 全国の書店で販売 民研から購読可能

- ◆ 108号 <2020年冬>
特集 不確かさを生きる
——コロナ時代の社会と教育
- ◆ 107号 <2020年秋>
特集Ⅰ 教育は気候変動にどう向きあうか
特集Ⅱ コロナ危機下の教育

賛助会員 加入のお願い

民主教育研究所は

全日本教職員組合の組合員と賛助会員によって、財政が支えられ運営されています。真理と真実に基づき、研究を通して広く教育に携わる者の実践を支え励ます拠点として、1992年に設立されました。8つの研究委員会と「道徳教育プロジェクト」によって、研究が進められ、研究と実践をまとめた『年報』や季刊『人間と教育』を発行しています。

賛助会員になると

季刊『人間と教育』、「民研だより」(年4回)を無料で自宅に郵送。民研発行の書籍を各1冊、半額で購入可。

民研だより No.146 2020年12月10日

発行 民主教育研究所 発行責任者 梅原利夫

〒102-0084 東京都千代田区二番町 12-1

全国教育文化会館 5F

TEL 03-3261-1931 Fax 03-3261-1933

Email office@min-ken.org

HP https://www.min-ken.org

